

トビイカの仔魚について

当 真 武

トビイカ資源調査中、久米島、喜屋武岬沖でトビイカの仔魚やその他の魚類等を採集した。その概要を報告する。魚類の同定には京都大学吉野哲夫氏の御指導を得た記してお礼申し上げる。

調査船、くろしお (21.44 t 100馬力)

調査期間、1971年6月26日～6月30日

調 査 方 法

沖縄近海のトビイカ漁は夕方から翌朝までの夜間操業である。今回のトビイカ資源調査は自動イカ釣機を使用しての試験であり船体前部に120V、1KWの水上集魚灯を点灯して実施した。操業終了後も集魚灯をつけたままにしておいたので、照らし出された海面には魚類やその他の動物が集まった。その中にタモ網を入れて標本を採集した際、偶然にトビイカの仔魚を得た。そこで調査期間中毎晩2時から4時30分まで採集を続けた結果、次表にのべるような資料を得た。タモ網で採集した個体はすぐ容器に移し船上で観察した。また外套長6～8cmの個体は飛走力が特に大きく、たびたび船上に飛来した。それらの個体も含めすべての標本は10%のホルマリン海水溶液で固定し陸上の実験室に持ち帰り測定した。なお渡嘉敷志久湾内で採集された個体も付記した。

調 査 結 果

採集年月日 1971年6月27日

場 所 久米島沖

位 置 N. 26° 05' E. 127° 05' ST. 6

表1. トビイカ *Symplecteuthis Oualanensis* LESSON

№	外套長 cm	重量 g	性	備 考
1	6.57	8.01	—	船上に飛来、水温 0 m 27.8°C ~ 50 m 23.2°C
2	6.54	7.81	—	風向 SSE、風力3、波浪3、比重1.35、天候6 気圧1.022 mb、水深1.200 m

その他の採集物

№	和 名	学 名	体長 cm	体重 g
1	マガリハダカ	<i>Myctophum evermanni</i> GILBERT	6.22	2.82
2	マガリハダカ	"	5.01	1.69
3	ダツの仔魚	<i>Ablennes</i> sp	13.01	2.90

採集年月日 1971年6月28日

場 所 久米島沖

位 置 N. 26° 33' E. 126° 57' ST. 6

表2. トビイカ

No.	外套長cm	重量g	備 考
1	4.12	2.25	タモ網で採集
2	3.34	1.07	水温 0 m 28.1°C 50 m 24.8°C、波浪2、天候6、
3	3.70	1.82	気圧 1,022 mb、水深 1,000 m
4	4.09	2.39	

その他の採集物

No.	和 名	学 名	体長F.L.cm	体重g
1	バショウカジキの仔魚	Histiophorus orientalis	9.87	4.09
2	バショウカジキの仔魚	"	7.51	2.14
3	ハナビラウオ	Icticus pellucidus (LUTKEN)	3.25	0.27
4	カツオノエボシ	Physalia physalis (Linnaeus)		
5	サヨリトビウオ	Oxyposhamphus microterus micropterus (VALENCIENNES)	14.02	27.77

採集年月日 1971年6月29日

場 所 喜屋武沖

位 置 N. 25° 49' E. 127° 37' ST. 9

表3. トビイカ

No.	外套長cm	重量g	No.	外套長cm	重量g	備 考
1	4.97	3.49	2	3.17	1.17	タモ網で採集
3	5.00	3.15	3	5.38	5.22	船上に飛来、水温 0 m 29.0°C
5	5.81	6.36	6	6.32	7.06	50 m 23.2°C、波浪3、天候bc
7	6.96	9.61	8	7.01	10.05	風向SSW、気圧 1,020
9	4.59	2.66				水深 1,300~1,500 m

その他の採集物

No.	和 名	学 名	体長cm	体重g
1	マガリハダカ	Myctophum evermanni G.	6.12	3.09
2	ニノジトビウオ	Hirundichthys speculiger (VALENCIENNES)	21.57	11.60
3	ダルマトビウオ	Prognichthys SP.	5.47	2.94
4	ダルマトビウオ	"	9.28	7.17

採集年月日 1971年7月30日 ST. 7

場 所 渡嘉敷村渡嘉志久湾(金城武光氏採集)

表4. トビイカ

№	外套長mm	重量g	備	考
1	4.04	1.90	夕方、海面を泳いでいるのをタモ網で採集。水深約30m	

1) トビイカ 仔魚の第4腕長は左右ともほぼ同長であるので外観からの雌雄の判別はつきにくい。触腕も他の腕に比べ著しい差はない。(図1)

2) この時期の仔魚の常態は鮮紅色をしている。また背

中の甲殻の部分と阿眼の上部にある黄白色を除いて透明になりえる。(図2-A)

3) タモ網ですくって容器(バケツ)に入れると興奮して墨を吐きながら活発に泳ぎ回り、急に水面に向けて容器の外へ飛びでる個体もあった。約5分間に3回も飛びでた個体もみられた。なかには反動もつけないで垂

直にかなりの高さまで飛び上がる個体もあった。このように飛びでた個体を容器に戻してくりかえし観察を続けると、しばらくは泳ぎ回るが脱出不可能とみたのか容器の底を向くとその底

の色に合わせて急速に灰白色に体色を変えた。そしてある個体は容器の底にある個体は壁に図2のBの状態で吸いつき静止して波にゆられる状態が続いた。同様にして図1に示した5個体について観察した。容器内で観察した個体は平均30

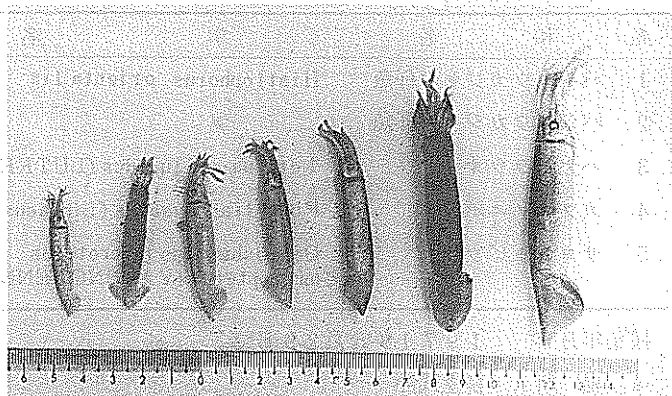


図1. トビイカの仔魚

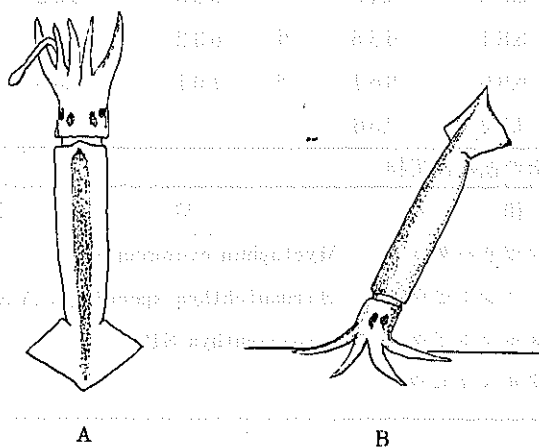


図2. A: トビイカの仔魚—透明になった状態
B: 底面に静止した状態

分生きた。それ以後は急速に衰弱していった。

このように簡単な観察からではあるが、スルメイカ科に属するスルメイカ幼生は海底を「はふく」することが知られている(浜部、1965)、このことから同じ科に属するトビイカも同じ状態で過ごす時期があると想像される。

4) 採集した場所は沿岸から約15～18マイル沖合の水深1,000～1,500mの表層である。